

# 全学交流会

— 短期大学における全学学生間の対面交流会の試み —

櫻井 真

Junior College-wide Exchange Meetings

- Face to Face Exchange Meetings Between Junior College Students -

Makoto Sakurai

---

女子短期大学で学ぶ学生の社会性を育み視野を広げる目的で、全学交流会を授業の一コマとして1年後期から2年後期までの在学中に計3回実施した。全学交流会では短大1年生または2年生が一同に集い、他の学科専攻コースに所属する相手と二人一組のペアを作り交互に話し手と聞き手を務めて対話した。自己紹介、自分が学修している内容や科目、卒業後の進路、卒業までに身につけておきたい事などをテーマに対話した。対話時間は各々が1~2分の短時間に設定した。実施後のアンケートでは楽しい時間だった、話すことや聴くことができたなどの評価がたいへん高かった。はじめての学生に声を掛ける、他の学科専攻コースの学生と対話して視野を広げることができる、対面で自分の考えを伝え相手の話を聴く機会となっているなどの感想が寄せられた。

Key Words : [全学交流会] [対面] [話し手] [聞き手] [短期大学]

(Received October 24, 2023)

## I はじめに

大学、短期大学、専門学校などでは学生生活への導入や学生間のコミュニケーション円滑化を図るために、「全学交流会」や「学生交流会」などの名称で行事が実施されている。その多くはレクリエーション大会、スポーツ大会、あるいは特定のテーマを持って一部の学生が参加する集いである。鹿児島純心女子短期大学（以下、本学）でも4月末に体育祭を実施して学生間の交流を推進している。一方、修業年限が2年の短期大学では学生が授業以外で様々な活動に関わり、自分が所属する学科専攻コース以外の学生とコミュニケーションを持つ機会は時間などの都合で制限される。また、多くの高等教育機関では学生の自立や主体性などを育む授業（例えば、佐野他、2019）が実施されているが、短期大学で導入するには様々なリソースが不足するなどの理由で困難な場合が多い。

本学は生活学科と英語科あわせておよそ200名の学生が学んでおり、生活学科は生活学専攻、

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科食物栄養専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

こども学専攻, 食物栄養専攻から構成される多様な専門性を備えている。しかしながら, 学生生活の中で他の学科専攻コースの学生と知り合う機会は少ない。そこで, 全学共通の総合人間科目で開講されるキャリア教育科目の1コマを活用して, 学生の社会性を育み視野を広げる目的で「全学交流会」を2019年から実施した。この授業では他の学科専攻コースの相手と二人一組のペアを作り, 話し手と聴き手を交互に務めた。複数年にわたって実施して改善を重ねた成果を報告する。

## Ⅱ 全学交流会の構成

### 概要

本学体育館(バスケットコート2面が取れる広さ)に学生が集まり, 司会進行係(教員)の指示のもと, 二人一組のペアを作り司会から与えられたテーマについて対話した。できる限り他の学科専攻コースの学生, 今まで話したことがない学生とペアを組むこと, 出身高校が同じグループなどでも集まらないよう指導した。ペアの間では話す役と聴く役を交互に担当した。話す時間は1~2分で司会進行係がストップウォッチで測り, 時間いっぱい話すように指導した。

本学で開講される総合人間科目のうち1年後期, 2年前期, 2年後期に開講されるキャリア教育科目の1コマ(90分)でそれぞれ1回, すなわち短大2年在籍の間に3回体験できるように全学交流会を配置した。これらの科目は各学科専攻コース共通の曜日・時限に開講されており, 同学年の学生全員が参加することができた。ただし, 全学交流会を開始して後, カリキュラムの編成上生活学科の一つの専攻が参加できなくなった。その場合, 全学交流会ではなく学生交流会の名称で授業を実施したが, 本稿では全学交流会の名称で統一することとする。また, 会場は本学体育館を使用するため, セメスターの中盤で寒暖が厳しくない6月, 11月頃に実施するよう授業計画に組み込んだ。

1年後期から2年後期の1年半を通じて実施することで, 「話したことがない同級生」に声をかけてコミュニケーション能力を涵養する場とし, テーマの内容も短大2年間の学修に合わせて変えていった。なお, 入学直後の1年前期には各クラス内のコミュニケーションの充実が重要と考えて実施しなかった。

### 実施方法

#### A. 事前説明と資料の配布(各クラス) 約10分, 移動10分

体育館に集合する前に, 各クラスの教室(学科専攻コース別)で全学交流会の概要を説明した。出席カード(図1)を配布して使い方を説明した。出席カードにはクラス, 出席番号, 氏名の記入欄。3つのテーマを対話した相手のクラスと出席番号, 氏名の記入欄。アンケート欄と感想文の自由記述欄を用意した。また, 裏面は質問をメモするスペースとして使用した。初めて取り組む1年後期の1年生に対しては, 全学交流会の概要や出席カードの使用方法について丁寧に説明した。

対話の質問は三つ用意したが, 一つ目の質問は各クラスの事前説明の時間に学生に提示して

**全学交流会 出席カード**

令和 年 月 日 ( ) 限

クラス \_\_\_\_\_ 出席番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

テーマ	テーマ1		テーマ2		テーマ3	
	クラス	氏名	クラス	氏名	クラス	氏名
1人目						
2人目						
3人目	—	—				

<感想> 5(そう思う) — 4(まあそう思う) — 3(ふつう) — 2(あまり思わない) — 1(思わない)

5~1  
どれかに○

- ・楽しい時間でしたか
- ・話をすることができましたか
- ・話を聴くことができましたか

5(よくできた) — 4(だいたいできた) — 3(ふつう) — 2(あまりできなかった) — 1(できなかった)

5(よくできた) — 4(だいたいできた) — 3(ふつう) — 2(あまりできなかった) — 1(できなかった)

.....

.....

.....

.....

.....

図1. 出席カード

あらかじめ考える時間を与えた。二つ目、三つ目の質問は体育館の現場で考えてもらうこととして事前には伝えなかった。その後、出席カードと筆記用具を持参して体育館に移動した。

## B. 全学交流会（体育館） 約70分

以下は司会進行係の教員が進行した（ステージ上でマイク使用）。

### 1 事前説明 5分

学科専攻コースごとに整列させ、概要を簡潔に再度説明。その際に改めて、

- (1) できる限り他の学科専攻コースの学生とペアを組む。
- (2) 対話の際には、指示がある時間をフルに使用して話すよう心がける。
- (3) 話す人は相手を見て分かりやすく伝えるよう心がける。聴く人は相槌、うなずきしながら話をよく聴く。

ことを伝えた。

### 2 ペアによる対話 50分

三つの質問（テーマ）について対話を実施した。以下に進行例を示す。

#### (1) ペア作り

他の学科専攻コースの学生を探して声をかけ二人一組のペアを作る。ペアができたら1m離れて対面で座る。全体の学生数が奇数でペアを作れない学生がいた場合には教員が一人参加した。

#### (2) ペアで対話

- ① 「よろしくお願ひします」と挨拶する。

- ② 自分の出席カードを相手に渡し、クラスと出席番号、氏名を書いてもらう。
- ③ 質問を口頭で発表（一つ目の質問は各クラスで提示済み）。
- ④ 対話の時間を指示（1分、1分30秒、2分を質問によって使い分け）。
- ⑤ 考慮時間（Thinking time）1分程度。話す内容を考える。一つ目の質問では不要。
- ⑥ 話し手と聴き手を決める（ジャンケンで勝った方から話す）。
- ⑦ 対話する（相手に話す。話を聴く。）
  - \*開始と終了のタイミングは、司会進行係が指示する。
  - \*話し手は相手の顔を見て持ち時間一杯話すように努める。
  - \*聴き手は相手の話をよく聴く。うなずく、相槌を打つなどに努める。
- ⑧ 話し手と聴き手を交代して同様に対話する。
- ⑨ 最後に「ありがとうございました」と互いに挨拶する。
- ⑩ 立ち上がり移動。次のペアの相手を探す。
  - ①～⑩を繰り返す。対話の時間はストップウォッチで正確に計時する。

司会進行係（ステージ上）は、全体の進行を促す言葉を掛ける。以下のように。

「ペアを作るために移動して。動いて。」

「ペアが出来たら座って」「密にならないように移動して」

「順番を決めるじゃんけんをしてください」

「最初に話す人は手を挙げて」

「それでは、用意スタート」

「これで、終了です」

「最後に、ありがとうございました と挨拶して」 等

### 3 総括 15分

- (1) 教員からのコメント ペア作りや対話の様子などをコメント。
- (2) 出席カード記入 アンケート、感想をその場で記入。対話が終わったばかりで臨場感があるその場で記入したほうが良い。翌日、教科担当学生が集めて提出。
- (3) 解散

### 4 質問（テーマ）の例

対話の質問（テーマ）内容は自己紹介、近況報告、短大の学修、就職活動や卒後の進路を意識したものなど1年後期、2年前期、2年後期で変えていった。

#### (1) 1年後期

質問① 「自己紹介」 1分×2回

全学交流会をはじめて体験する1年後期には、導入のテーマである自己紹介を円滑にするためにプリントを作成した。ファシリテーションを進める資料（京都産業大学F工房、2012）を参考に、自己紹介の9種類のテーマを提供する「自己紹介のタネ」（図2）を作成して事前説明の教室で配布した。

テーマ：「通学の話」「私の推し」「部活の話」「地元の自慢」「今日の朝ごはん」「おすすめの店」「私の家族」「バイトの話」「子供の頃から好き」 から一つ

自己紹介のタネ		
通学の話	私の推し	部活の話
地元の自慢	今日の朝ごはん	おすすめの店
私の家族	バイトの話	子供の頃から好き

図2. 自己紹介のタネ

質問② 「自分は今、何を勉強しているか。一番おもしろい、興味ある科目や学修内容。」  
1分30秒×3回

質問③ 「1年生が終わるまでに、できるようになりたいこと。」 1分30秒×2～3回  
二つ目、三つ目のテーマはその場（体育館）で考えてもらうので事前には伝えず、進行中に口頭発表した。テーマは出席カードの裏面に各自メモしてもらった。テーマは3回程度ゆっくり読み上げた。

(2) 2年前期

質問① 「この1週間の出来事」 1分×2回

この一週間の学内、学外の出来事から印象に残ったことについて話す。単に出来事を羅列するのではなく、心に残った、大切な事柄を中心に話す。

例) 授業、学生生活、アルバイト、家庭での出来事 他

質問② 「短大の学修で、一番興味深い内容や科目」 1分30秒×3回

質問③ 「卒業後の進路（業種・就職先企業、進学など）」 1分30秒～2分×2～3回

(3) 2年後期

質問① 「この一週間の出来事」 1分30秒×2回

質問② 「短大の勉強で、一番面白かったこと、興味深かったこと。自慢できること。」  
1分30秒×3回

質問③ 「卒業するまでに身に付けておきたい、出来るようになりたいこと。」  
2分×2～3回

三つの質問の対話は相手を変えて行く。各質問の繰り返し回数は時間や学生の様子を見ながら2～3回とした。

## 5 その他

ペアを作る際には動いて相手を探すことを呼びかけた。新型コロナウイルスなど感染症予防の観点から、令和5年前期まではマスクを必ず着用することとした。また、ペアを作ったら1m離れて対面して座った。

体育館全体に広がり密にならないように気をつけることを指導し、体育館内の換気にも留意した。

## Ⅲ 出席カードのアンケートと感想文

1年前期（令和4年11月7日実施）、2年前期（令和5年6月12日実施）の出席カードから全学交流会の教育効果などについて検討した。

### 1. アンケートの結果

1年後期、2年前期いずれのアンケートにおいても、設問「楽しい時間でしたか」「話をすることができましたか」「話を聴くことができましたか」に対する回答はほとんどが、5（そう思う、よくできた）、一部が4（まあそう思う、大体できた）で非常に高評価だった。また、全学交流会の授業終了時には、高揚した、澁澁とした雰囲気が多く多くの学生から感じられ刺激を受けた様子が伺われた。1年後期ははじめての体験から、2年前期は慣れからやや否定的な回答も予想したが、3（ふつう）・2（あまり思わない、あまりできなかった）・1（思わない、できなかった）の回答はみられなかった。

### 2. 感想文（1年生）

1年後期にはじめて全学交流会を体験した学生の感想文を引用して、全学交流会の効果について検討する。

#### ① はじめての学生と対話することについて

「交流会が始まる前までは、自分から声をかけてペアを作ることができるか不安でドキドキしていました。」

とあるように約200名の学生から、ペアの相手を探すことが苦手の学生が多い様子だった。しかし、

「自分から声をかけることが苦手だったが、すべてのコースの人と話すことができて良かった。」

「最初のはじめての人たちと慣れなかったのですが、徐々に慣れていき話すのがすごく楽しかった。」

「後半からは自分から声かけを行い、いろいろな会話ができて楽しかったです。」

「初めての相手と二人きりで話すのはとても怖くて緊張していたが、話してみるとどんどん話が進んで楽しかった。もう少し長くても良かった。」

などの記述が多くみられた。授業はじめは他の学科専攻コースの学生と話をすることに不安、抵抗を感じていたが、次第に克服していく様子が多数書かれていた。一対一の対話が大

人数で同時に実施するので、うまくできなくても目立たないので大丈夫。1～2分ですぐ終わるなどの気安さがあったのかもしれない。

② 他の学科専攻コース学生との交流について

「他の学科の学んでいることが知れて、全然違うことに驚きました。」

「普段、他の学科専攻コースの人と関わることがないので良い機会だった。」

「他コースが勉強している内容や大変なことを話せてよかった。」

「他の学科の雰囲気わかり、新鮮な気持ちになることができた。」

「学んでいる内容の違いがとても面白く、私も勉学に励んでいこうと思うきっかけにもなりました。」

などの意見が多くみられた。本学では他の学科専攻コースの学修に触れる機会が少ないが、学生の生の声を通じて他コースの学修の特徴などについて知り視野を広げる貴重な機会になったと考えられた。

③ 一対一の対話について

「最初は1分でも時間が余ってしまっていたが、回数を重ねるごとに時間が足りなくなるくらいまで仲良くなることができたため、うれしかった。」

「自分が話している時に、相槌や目を見て話を聞いてくれていると話しやすく、会話が盛り上がるような印象を受けた。」

「一人で一方的に会話を進めるよりも、相手の話に質問や相槌をすることで、より楽しく会話をすることができた。」

「短い時間で伝えたいことを分かりやすくまとめるのはとても難しかった。」

「相手のおススメの店などメモをして話を聞くと喜んでくれた。」

「ただ話すだけではなく、聞く姿勢も重要だと学んだ。」

などの感想が寄せられた。戸惑いながらも話し手、聴き手として対話に取り組む様子が伺われた。聴き手としての気付きに言及している学生もみられた。

④ 自己との出会いについて

「最初は緊張もあったけど、初対面の人とこんなに話せるんだと自分の一面を見つけることができいい経験になった。」

「聞き上手な子が多くて、見習おうと思える部分をたくさん発見できた。」

など、自分のありように気付く機会となった学生もみられた。また、今後の自分の成長について

「今後社会人になるとコミュニケーションが最も重要なため、その練習でもあり良い機会だった。」

「コミュニケーション力をもっと上げて、これからもたくさんの人と関わりたいと思った。」

など、具体的に言及する感想もみられた。

⑤ 総括的な感想

「今回このような機会があって本当に良かった。他の科のいいところの話を聞くことができた。」

「知らない人と話をするのは苦手だったけど、今回話しをしてみてとても楽しかったです。」

「友達を増やすことができ良かった。いろいろな面で役に立つと思った交流会だった。」

など前向きな記述が多数みられた。出席カードの感想文とはいえ、全学交流会を良い体験として積極的に捉えて具体的な体験を記す感想がほとんどで否定的な記述は見当たらなかった。ただし、成績評価と関連する出席カードの記述であるので、負の評価が隠れている可能性もある。学生のストレスにならないように注意する必要もある。

### 3. 感想文 (2年生)

2年前期の感想文では、1年次の自分と比較した感想がみられた。

「去年の経験も踏まえて、よく話すことができた。」

「1年の頃よりスムーズにペアを作ることができた。」

「コミュニケーションをとることが上達していると気が付くことができました。」

「1年生の頃よりも人と話すことに慣れてきているということを実感しました。」

など、自分の成長に関する記述がみられた。また、就職活動について、

「面接では今日のことを生かして明るく笑顔で話したいと思う。」

「面接で自分のことをスラスラ話せるための準備にもなりました。」

「みんな就活のことで悩んでいたりで、私も頑張ろうという気になった。」

「おたがいにこれからの就活のことや、自分のことについて話すことができ少しリフレッシュになりました。」

「就活は「お互い頑張ろう」と高め合い、励ましあえたのですごくよかった。」

「将来の話では、自分ではあまり考えたこともない職種や内容だったのでいろいろと考えるきっかけになりました。」

「自分の視野が広がった気がした。」

など、就職活動や進路に関連した前向きな記述が多くみられた。また、2年後期に実施した全学交流会の感想では、卒業後の進路や2年間の学生生活を振り返るものが多くみられた。

## IV 考察

本学は生活学科と英語科を備えた短大であるが、同じキャンパスで学生生活を過ごしながらも、他の学科専攻コースの学生と接する機会が少ないのが現状である。そこで、自分と異なる専門性を学ぶ同級生と対話することで社会性を育み視野を広げることを目的として全学交流会を実施した。その結果、当初の目的以外にも様々な教育効果が見込まれたため、質問の内容や対話時間、出席カードを工夫するなど改善を重ねてきた。アンケートや感想文の所見などに基き成果をまとめた。

学生にとって全学交流会は対話以前に「ペアの相手を探すことから始まる」であった。約200名の同級生に対して「私とペアになりましょう」と声を掛けて相手を決めるのは、多くの学生にとって困難を伴う作業だったと推察される。司会進行に際しては優しい言葉遣いで丁寧に行進して学生のストレス軽減に努め、学生が落ち着いてペア作りに取り組めるよう留意した。ペア作りの方法についてはあまりアドバイスを与えず、各自のペースで努力して解決できるよ



うにした。

一対一の対話に関しては、学生が話しやすいテーマを提供することを心掛けた。1年次には自己紹介からはじめることとし、自己紹介のタネを提供して対話のテーマに困ることがないように配慮した。その後、日常生活、学修内容や進路という学生に身近なテーマを用意した。学修内容について予備知識が乏しい他の学科専攻コースの学生に対して説明することで、自身の学修内容への理解を深め言語化することを図った。1～2分という説明時間については「短い時間で伝えたいことを分かりやすくまとめるのはとても難しかった」との感想があった。規定の時間が来て「はいそこまで。終了ー」と告知しても、対話が続いている場合が多かった。「1分間も話すことができるか」の心配よりも「1分間で話をまとめるのがたいへん」が実情であった。当初、話し手について話す内容や時間を心配したが、実施の現場では聴き手側の準備が出来ていない、聴く姿勢が出来ていないことに気付いた。そこで相槌を打つ、相手を見ることなどが大切などの傾聴の姿勢について説明するようになった。これにより、聴く姿勢の大切さが分かったとの感想が寄せられるようになった。2年次には就職活動の面接などで話すこと、聴くことの大切さを体験していることも影響していると考えられた。本学は女子短期大学で在学生の殆どが鹿児島県出身であるなど学生の属性が比較的均一であり、対話による交流がやり易かった可能性もある。近年、入学する学生の資質が多様化しており今回提示したプログラムは適宜修正も必要であろう。

全学交流会は参加した学生にとって、はじめての学生に声を掛ける、他の学科専攻コースの学生と対話して異なる学修内容を知り視野を広げる、対面で自分の考えを伝え相手の話を聴くなど様々な体験の場となっていた。修業年限が2年間と短い短期大学において、全学交流会は学生間のコミュニケーションを図り社会性を育む貴重な機会になると考えられた。

## V 謝辞

全学交流会を実施するにあたり、科目担当者としてご理解とご協力をいただいた鹿児島純心女子短期大学の教員の皆様に深謝する。また、全学交流会に参加してアンケートを回答し感想文を寄せてくれた学生に感謝する。

## VI 参考文献

- 京都産業大学 キャリア教育研究開発センター F工房. 2012. キャンパスで使える！アイスブレイク集 三つ選んで自己紹介. 18-19.  
<https://www.kyoto-su.ac.jp/features/f/action/ahcetq00000010ni-att/icebreak.pdf>
- 佐野潤子・増谷真紀・角田彩乃・佐々木泰子. 2019. 「未来起点ゼミ」における対話を中心とした授業の実践報告. 高等教育と学生支援－お茶の水女子大学紀要－. 2019年第10巻：64-72.

